

むかし、雨畑のおくの山に、大きな木がありました。大人が何人で手を回していいか分からないほどの太い木でした。

あるとき、腕のいい木こりたちが、おおぜいで、この木を切るようになりました。木こりたちは、道具やお弁当を背負って、山に登っていきました。みんなで切りましたが、あまりに太い木なので、その日一日ではとても切りたおせませんでした。そこで、その日はとちゅうまで帰って、つぎの日、続きを切ろうということになりました。

ところが、つぎの日行ってみたら、昨日切った木の切りくずの木っ端がみんな切り口にはりついて、木はもとどおりになっていました。きこりたちは、

「しかたがないなあ。それじゃ、今日も一生懸命がんばろうな」といって、切りはじめました。やっぱり全部切ることができないで、とちゅうまで切って帰りました。

ところが、つぎの日行ってみたら、やっぱり木っ端がみんな切り口にはりついていました。そんなことが続くので、年かさの木こりがいいました。

「こりゃあ、どうもふつうの木じゃないぞ。山の主かもわからないから、様子を見てみよう」

そこで、元気のいい、知恵のある者が二、三人残って、かげに隠れて見ていようということになりました。

夜になると、山の王さまヌルデの木が先に立って、木の精たちがざわざわ、ざわざわ出て来て、大きな木の周りに集まりました。そうして、切り口に、木っ端をはりつけはじめました。そのうち、ひとりの木の精が、

「おい、おれたち、こんなことして毎日毎日一生懸命はりつけているが、連中に木っ端を燃やされてしまったら、おしまいだなあ」といいました。

隠れていた木こりたちはこれを聞きました。そして、夜が明けて、ほかの木こりたちがやって来ると、みんなで、でっつら、でっつら、大きなたき火をたきました。そして、木を切るかたっぱしから、木っ端を燃やしていきました。おかげで、つぎの日は、昨日の続きを切ることができました。

さて、いよいよ明日は木がたおれるという前の晩、この山の大きなヒノキに、たくさんの明かりがともりました。村の人たちが、うちの外に出てながめていると、うおん、

うおんと、山じゅうの木が泣ないている声が聞こえました。泣き声は、いつまでもいつまでも聞こえました。

あくる日、とうとう、その木が大きな音を立てて倒たおれました。

木からは角材かくざいが千丁も取れました。それからその山は千丁木といわれています。

村上郁再話

資料『季刊民話』第一号／民話と文学の会